山とスキー

大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可
大正十四年三月三十一日印刷納本
大正十四年四月一日發行（毎月一回一日發行）

第四十八號

札幌 山とキスーの會 發行

登山履歴

（明治三十五年十一月十日生
大正十三年十二月三十一日歿）

大正五年五月　比良岳
同　七月　白骨温泉——乗鞍——白骨——上高地——松本——大町——白馬——
同　六年七月　白山——立山
此年より關にてスキーの練習を始む
七年七月　燕岳——大天井——常念——穂高——燒岳
同　十二月　關にてスキー練習
同　八年七月　立山——劍岳
同　九年四月　關にてスキー練習
七年より九年へかけて、毎
十年　不
同　十一年四月　スキー合宿
同　十一年十月　ニセコアンヌプリ、チセヌプリ、
羊蹄山
十一月　手稲山
二月　手稲山
同　三月　（二十一—二十五）青山温泉スキー、
同　五月　（二十五—二十七日）十勝岳
奥手稲山——ハルカ山——定山溪
——砥石山
同　四月六日　蘆別岳
五月二十日——六月三日
松山温泉——化雲岳——忠別岳——ヌタツプヤムペツ——石狩川——石狩岳（頂上を極める）——ヌタツプヤムペツ——忠別岳——化雲岳——松山温泉
同　七月　黑岳
同　十二月二十三日—二十七日　青山温泉スキー合宿
二十七日　ニセコアンヌプリ

大正十四年四月發行

先に同人板倉勝宣君のために追悼號を出したるところの本誌は、こゝに再びニセコアンヌプリに於けるアクシデントにより、舊臘十二月三十一日他界せる同人藤江永次君のために本號を輯することゝなつた。

冬季山岳にをける危險については、われらのつねに戒心ををこたらざりしものであるが、今日の經驗と知識とによる一切の合理的處置を超えて、時として運命は悲しき結果をわれらにまでもたらすのである。滑降方法の選擇にあたつて、呪はしき魔手は君を促へて、すばらしき直滑降を敢行せしめ、然してこれがために終に天界に導き去つたのであつた。

山に生き、雪を友としたる君なるが故に、本誌並びにわれら同人のために配慮を重ぬること淺からず、更にその明晰なる頭腦と、學界に對する眞摯なる抱負とをもつてして探究の志に厚かりしことを惟ひ、また家にあつて深憂にひかれたる君なるが故に、人生の悲しみ一しほに深きを覺えるのである。

シリベシ平原に端麗なる空際を劃して、立つニセコアンヌプリは、君が爲に遺されたる純白のピラミッドとして春秋その麓をよぎり、冬夏その峯を訪ふ人々によつて、永く仰ぎ見らるるであろふが、尚君を憶ふ切々の情はこゝにさゝやかなる誌面を以て、人及びアルピニストとしてあまりにも短かかりし君が生涯の追想にあてんとおもふのである。

登山履歴

（明治三十五年十一月十日生
大正十三年十二月三十一日歿）

大正五年五月　比良岳
同　七月　白骨温泉——乗鞍——白骨——上高地——松本——大町——白馬——大町
同　六年七月　白山——立山
此年より關にてスキーの練習を始む
同　七年七月　燕岳——大天井——常念——槍——穂高——燒岳
同　十二月　關にてスキー練習
同　八年七月　立山——劍岳
同　九年四月　關にてスキー練習
七年より九年へかけて、盛に京都附近の山に入る。
同　十年　不明
同　十一年四月　北海道に渉る
同　十一年十月　手稲山
同　十二月　青山温泉スキー合宿
ニセコアンヌプリ、チセヌプリ、羊蹄山
同　十二年一月　手稲山
同　二月　手稲山
同　三月　（二十二日—二十六日）青山温泉スキー合宿
ニセコアンヌプリ、イワヲヌプリ
チセヌプリ、目國内岳、岩内岳
同　五月　增毛町——武好驛遞——雄冬岳——濱益岳——群別岳——暑寒別岳——增毛町
同　七月　帶廣——オトプケ川——石狩岳——石狩川——愛別
同　十二月　（二十三日—二十九日）青山温泉スキー合宿
同　十三年一月　手稲山
同　一月　（二十五—二十七日）十勝岳
同　二月　奥手稲山——ハルカ山——定山溪——砥石山
同　四月六日　蘆別岳
同　五月二十日——六月三日　松山温泉——化雲岳——忠別岳——ヌタツプヤムペツ——石狩川——石狩岳（頂上を極めず）——ヌタツプヤムペツ——忠別岳——化雲岳——松山温泉
同　七月　黑岳
同　十二月二十三日—二十七日　青山温泉スキー合宿
同　二十七日　ニセコアンヌプリ

在りし日の藤江永次君

蘆別岳頂上（右）

對山館にて（左より二人目）

逝ける友

— Der Verlorenen —

加納一郎譯

今はなき友の、假の世にありし日、まづしきわがおきふしにうるほひをあたへ、またはらからのごとく悲喜二つながら分ち暮したるを想ひ、哀惜の情ふかくわが心をとさす。瀑みなき時の流れに、流れゆきし、われらがレーベンスクライスに於ける、かずかずのことがらにつきて、心のまゝにしるしがたき故に、いまはたゞヨセフ・イットリンガーの Von Menschen～Bergen und anderen Dingen より一章を譯して拙き紀念とす。

われらの愛したる、なくなれる人を憶ふ。われらにとく先立ちて、空虛をあたへしは他の何者もかつてこれを醫しがたく、その去りゆきしことは心に傷となりて、くりかへし思ひ出され、ながく忘れはつべくもなく、年を重ねて人生の寂しさをますごともに、傷の痛みの深きを覺ゆ。われらの眼より見えずなり、或は見知らぬ地にて行方しれずなるはめづらしきことにはあらず。これらはたゞすべての希望のわれらより失はれてたえて再び還り來らざるのみなり。われはいま山またはいづこにてか、死に遭ひたる友のこゝを思ふなり。はじめての山の經驗にをいてその歡喜をわれらと分ち、また山の危險と苦難に兄弟(はらから)の如くこもに當れる仲間、彼はわれらのこの上なき生活の一部を墓場にもちゆきて、その悲しむべき償

ひとしてたゞ沈思と、長き年月に色あせたる憶出とのみを殘せるなり。

われやうやく二十歳なりし頃、わが第一の友を山にてうしなひたりき。そははじめてのアルプスの峯への旅にをりて、はじめてアルプスの成功を惠まれたるときなりき。ことありし年頃の若き人々は、偉大なる經驗の實体をあらはすがごときことがら、たゞ一歩が最後の旅の路ともなるべきことがらに對する、たかき感動にをいてお互に、堅く崇き熱情に充たされるたり。他にては經驗しえざる山岳に於ける勇敢なる行爲が、善と、純なる人間愛にまで築かれたる道の、最初の理解にをいて、人より人に橋を架して、こゝに彼等は人の善きと弱きとの全てにむかひて、その眼をみはる。彼等にとりて大いなる強き、また崇き美しきものゝ全てにをいて、しらずしらず友として近づき、一つ一つの事象につきて規矩と象徴とを求むるものなり。自らの經驗は學校の机上にてもたらさるるよりも、年に似合はず、より多くの知識をもたらすものなり。われらは新しきと、大なると、未知とに對して相携えてすゝみ、それらをわれらは山岳にをいて求めまた見出せりしばしばわれらは星の輝く夜を山に彷徨ひたりき。をそれとよろこびにわれら相結びて、峯の幸の歡喜を分ちたりき山を遙かにはなれし都にありては、共に座して打ち語りつ、過ぎし日の想出に沈み、また來る日の計劃を論じたりき。かくてわれらは運命の黒き手——そは雪崩にてありき——が友のために、正しき時よりもとく前に墓塲をとゝのふるまで同じ道を歩みたるなり。

われらは若きものゝ小さきまどひにをける親はしき仲間なりき。われらをむすびつけし最初の絆は同じき學び舍に在りしことなり。神の光のごとく、いづこよりかわれらの胸にふとわきし、山に對する感興は、われらを解きがたき圏に融合せしめ、われらの友は最上の唯一の友、人として得ることかたきところの一人なりしなり。彼は高尚、純眞の人格と、宗教的なる眞理を愛する心をもち、自ら持すること嚴、他に對して正しく、善と認めたることは迷はず心を決して、をそるることなく、不撓の意志をもてすゝむ等すべてのよき性情をそなへて、同年輩の仲間にありて、模範たり指導者たりき。

山仲間としての彼は、眞實にして信頼し得て、他を輕んずるがごときことなく、彼の手にしかとザイルの握られあるとき彼が確實さの中には人のなし得るところの全ての在るを見て、友は安らかなるをえたるなり。彼の顏に決心の色あふれ、その頑强の体軀に筋肉の引しまれるを一瞥せば、最後の支持にまで、若し必要なる場合には何等のためらひもなく、墜落せる友と共に深き谷にまで行かんとする準備あるを認めたり。彼が山に對する愛着は宏大にして境なく、そは彼をして自らその犧牲とまでなせり。彼の兩親は既に死してあらず、彼は豊かにまた繫累なく、人生の全ての門戸は彼の爲に開放せられありしと雖も、彼は山ををいて何事をもなさゞりき。彼はその自由なる時間を全て之に投じたりき。なべての人のもつ弱さを彼はこの山への愛にもち、しかしてそは彼をしてわれらにかく親ませたるなり。われ今日彼が姿をわが眼に呼びさますとき、われは山を聖むるがごときものゝみ、山にをける死をはたし得るものなりとの結論を得るなり。われは彼とも二度ドロミーテンに入れることあり。その最初のときは一週日に三十五峯を登りたりき。彼が死に先立つ三ヶ月われらはともに嵐と驟霰とのうちに、はげしく戰ひてオイグリアの頂に立ちたりき。

その同じき年のクリスマスに先立つ二週間、彼は多くの友達とともに、冬の雪つもれるアルガウの山に行けり。われは仕事のためにさまたげられてとゞまらざるを得ざりしに、そこに一人の仲間とともに雪崩に襲はれたりとの電報は來れり二時間ののちには、われは一人の友とゝもに列車のうちにありて、きづかはしき心もて、われらは打ち沈みて座してありき。他の人々のさはがしき立居は、われらにとりて何のかゝはりもなく思はれ、たゞわれらにはその友のことのみありしなり。われらの心にはなほかすかなる望を抱けり。をそらく、いかにかしてなほ一度の救ひをなし得るならんと。われらは慎重なる考慮に打ち勝つ何ものもなきことを思ひて心をはげましたりき。されどまたをそらく全ては單なる危憂にみちたる試みにすぎずして、怖るべき事實は、われらが遙かに支持しうるよりもより遠きを思ひ、若しわれそこにありしならば、そのとき、危險を指ししめして、此の不幸を避け得たるにはあらざるかなど、しばしば無用の沈思にさらはれしな

り。夕暮われらはアイネーズバッハに着きしが、既にしてわれらはその日十四名の人々が、その雪崩を探索して空しかりしとの報を得て、また何等ののぞみももはやなかりき。されど翌くる朝、一人の友とわれとのみは、遭難の場所へとのぼりゆけり。ルユックサックの中には、主人の跡をつけうるならんとて、さらはれし友の愛犬を伴ひ行きたりしが、犬はこれを拒み、雪の上に座してたゞ悲しげに吠ゆるのみなりき。われらはひねもす雪崩の一端より他端へと狹き溝を堀りたれども堅く凍れる雪の中に、杖の紐を見出したるほかに何ものも得るところなく、夕邊となりてわれらは疲れはてゝ歸り來れり。部室に座してその山を知る老いたる山案内者とともにこの遭難につきて打ち語れり。

深更われは同じ部屋に眠れるわが友の、怖ろしき叫び聲に醒めたり。われは彼を起すべく、をきあがりて、寢臺より出でたる彼の足を掴みたれど、彼はなほ怖ろしげに叫び、手足を打ちふれり。骨折りて彼を眠りさましたるに、彼は、死せる友が雪の中より彼に掴みかゝれるを夢みたりとあかしたりき。

次の朝、早くよりたしかに五十名の山人等は、手に手に、シャベルやピッケル、或は細長き鐵棒などたづさへ死者を探ぬべくつどひ來れり。われは何故にやとゞまりて待てり。明らかにしがたき畏怖がわれをとらへたるなり。をそらく見知らぬ人々によりて雪崩の墓場はあばかれ、死せる友はそれらの人々の道具と手とに觸れらるるならん。われはそを見んことを望まざりしなり。さればわれらは下にとどまりて待てり。その日よく晴れわたりて、新雪は谷に閃き、また山に輝き雲なき空は紺青に、ほがらかの大地の上を蓋ひたりき。われらは死屍のところに通ずる道の最もたかき所に在る小屋の前に、融けゆく雪の中に立ちてまてり。時とともに心の緊張するををぼゆ。やがて上より一人の男、息を切らして來る。『見出せりや』『二人は相近く死してあるを見出せり。こゝより約半時間のところに。』間もなくわれらは谷の彼方に人々の長き列の近づき來るを見たり。その中程の二つの長き黑きものは、見えざる手に導かるるがごとく不思議にも聲なくして、雪積める地を滑り來り、また黑き死の馬が、その支配者の屍を遙かの地より、その故郷にもたらすがごとく、上へ

下へ驅り來るを見る。そは危難に遭ひたる人の身を載せたる橇にてありき。そは近づき來るや戸前に靜かにとゞまれり。彼がこの同じき閾を、歡喜の心もてまたげるは四日前なりき。默してわれは戸口に立てり。全ての人は頭を垂れてあり。山への愛に命をさゝげたる人の前に立つは、わが生涯を通じて初めてのことなり。しかもそはわが友にして且つよき指導者たりし人なり。先の日、華やかなる生命にみちてありし彼、今は死して聲なく、硬く氷塊のごとく凍りてあり。

こはわがはじめての悲しみ深き体驗なりき。されどあゝ、そはわが最後の悲痛にてはあらざりき。なほわが親しかりし多くの人々の同じき道を歩めるあり。或は素僕にして信實なる友の、山との戰に奪ひ去られしは、金をもて償ひ難く、或はまた他の一人はあまりに熱烈の生命にみちてありしがために、その死は一の虛無をもたらして、ながく醫しがたかりしもあり。

友の契をうちくだき、または鎖の環をもぎとるがごとき人の運命は、重き打擊を與ふるものなり。しかもわれらがかく愛したる山にむかひて、道具をもちて立たざるべからざるは深き悲劇なり。されどわれらはこれをもて正しとなすべきや

山はしばしばわれらにその全峯より、極めて稀なる美と偉大の幾分を、或は冒險の高き幸福、又は人意の勝利てふ天惠をわれらに與ふ。かゝるとき過去の小暗き腦裡に、死せる友の姿は浮び出で、かくて去りゆきしものへの悲しみの心は呼びをこされて死したるものゝ靈に叫ぶ。おゝ、來りとゞまりて、なれと共にあるときの悅をわれにあたへよ。あゝ、なればかくのごとくしてわがそばより逝けり。なにゆえになれば、その愛するものよりとく去りゆきしやと。されどかく呼ぶともかれは默して感ぜず。かすかなる訴への言葉は聞きとられずして流る。彼のなしがたきに何を求むぞ。憩を與へよ。死したるものは死してさゞまれり。なれよりとはに去りゆきしものは、再び會ふの望はあらず。彼は燃え盡きて、たゞ灰のみを殘せる火のごとく、消え去り、またあとかたもなく風にふき去られしよわき響のごとく、たえたるなり。

『藤　江』

別所安次郎

藤江が死んでから「藤江」といふ名前が妙に懐しくなつた。小學校時代からの「お骨」と云ふ綽が一層親しい怨を起させる。今でも「お骨」と云ふと目の前にあのやせた顔——眼鏡の奥にクリ〳〵ッと光つた瞳を廻想する。私には「お骨」と言つた方がより感が出る。だから藤江をお骨に直して讀んでくれてもいゝ。

藤江と私との關係は地域的には京都に限られてゐる。だから京都を知らない讀者には興味がなからうと思ふが、此拙い文に依つて、藤江が少しでも理解されるなら私は滿足だ。　藤江は早く死ぬと云つてゐた。だが此んなに早く追悼文を書かねばならぬ等と誰が想像したらう。彼が未だ京都に居た頃私達はこんな約束をした。何方が早く死んだ方の者は一切の處分をしてもらはうと言ふのだつたが遂々私が其役目を引受けねばならなくなつた。それでも私は骨を拾ふ事の出來たのをせめてもの慰にしてゐる。彼は遺書を書いて死ぬとも言つた。山とスキーの合宿の二階で何れ程捜したらう。『遺書があるかも知れぬ』と云ふ事は山の連中や私達に一樣に感じられた事だつたが遂になかつた。腦膜炎なんかで死なねば遺書を書いて死んだらうと思ふと殘念だ。だが何んな遺書を書くだらうと思ふと思はず微笑される。幾束もあつた手紙をストーブにくべて燒いた時の悲しさは滅多に忘れられない。焔の中に燃えて行く手紙の束を見つめてゐる中に滅入り込んでしまつた。藤江の妹が『自分ごと持つて行かれた樣な氣がする』と言つたが本當にそうだつた。それでも最後の一通を投込んだ時には義務を果した樣な氣がした。始めて雪がやんで月のさしてゐるのに氣がついた程だつた。

忘れられないものに燒場がある。あの暖い骨箱を一寸で

も抱いて見たかつた。だがそれは又恐ろしい事の樣でもあつた。棺桶の中の藤江を想ふと何うしても手が出なかつた吹雪かれながら馬橇にゆられて行つた時、空には下弦の月が出てゐた。こんな雰圍氣に慣れない私達には北海の空は物恐ろしい感をさへ與へた。馬橇の鈴も悲しかつた。異鄕の空には死ぬまいと思つた程だつた。だが藤江は北海道で死んで幸福だつたかも知れない。合宿の温かい空氣の中で葬られて行く彼は友情の厚さに感激した事だらうと思ふ。

* * * * *

私が彼を知り始めたのは四年（中學）頃からだ。それ迄はやんちやな奴が居る位より知らなかつた。彼の話に依ると小學校時代から隨分やんちやらしかつた。親不孝も人後に落ちなかつたそうだが、入學試驗の勉强を始めた頃から大人しくなつた。中學時代の事を書けば恥しい事許だ。彼が一番失敗したのは私が先生に叱られた時加勢をしてやらうなんかと言つてやつて來ながら、應接室で散々油を絞られた時だつたらう。『テカ』と云ふ教師を皆で野次りたほして怒らせた事等は何時迄經つても忘れなかつた。何しろ先生に信用のない事を誇ぶ位に思つてゐたんだから堪らない。

中學時代は科學萬能主義だつた。時には滑稽に感じる事もあつた程の信仰振だつたから思へばふき出したくなる程の話もある。室中にコードを引張り廻して見たり蓄音機を小さいモートルで動かして喜んで居た。純正科學を目的にしてゐた彼は、小さい時から科學の方面に興味を持つてゐたそうだ。そして北海道へ行つてからは、少しは研究もしたらしいが、それが成果を結ばなかつた事は惜しかつた。

『お骨は野心家だ』とよく人が言つた。實際彼は野心家だつた。又コツソリやつて人を驚かす處—そんな性質の—なんかも人から非難を受けた。私は或程度迄非難を是認しなければならぬ事を彼の爲に悲しく思ふ。だが彼の性質を知つてしまへばそんな事は問題にならない事だつた。唯露骨に出して憚からなかつた處に彼の欠點があつた。

* * * * *

藤江と最も親しく交りを始めたのは私が入學試驗の準備を始めた頃からだつた。入學試驗は私達をお互に苦しめたものだが彼には殊に悲しい思出だらう。

北白川に三丁程を隔てゝ下宿して居た事があつた。ガラスの隙間からもれてくる風に小さくなつて勉强して居ると よく十時頃彼が來た。夜の白川は今でも嫌な感のする處だが其頃は殊に嫌だつた。然し話が出來ると毎日でも散歩した。彼は散歩しながら話す方だつた。私は又散歩しながら考へる癖があるので困つた問題に出くわすと何時間でも散

歩した。試驗勉强の遲い事にかけては私も彼には及ばなかつた。大膽な樣で小膽な彼はよく色々な事に氣を揉んだ。特に私の家庭の問題なんかは隨分彼をわづらはしたものだ。そんな事にはあれで仲々親切だつた。それに其頃彼を惱ませたものは家庭から離れようとする傾向だつた。私達の殆んど總てが經驗する此傾向は又彼にも否定出來なかつた。彼の性格が多角的であつたゞけ彼は激しくそれを出さねばならなかつた。妥協の出來ない彼には直面目に苦しめば苦しむ程欲くない傾向へと入つて行くのだつた。そして無力な私には又何うも仕方がなかつた。彼の爲に同情に堪へない處だ。　彼が花園に居た時分御室へ日參した。黑枠の格子戸のはまつた御堂は閑靜な感を與へてくれた。私達は其處に大きな慰安を見出した。古雅な感は又彼の性格によくはまつてゐた。一体に淋しい落着いた氣分を好んだ兼好は彼の好きな古人の一人だつたが、又一方に賑かな處へ行く事に於ても決して人に敗けをとる方ぢやなかつた。四條通は私達を決して厭かさなかつた。町娘の美さはいつも私達を喜ばせたものだ。然し私は郊外を散歩した時の方をよりよく思ひ出す。宇治川を下つて袴をボロ〳〵にしたのなんかは滅多に忘れない。もう一度下ろうと言つてゐたがそれももう出來なくなつた。

眞如堂の芝生に座込んで『お母さんに濟まない』と言つて泣き出した彼は一番悲慘のドン底にあつた時代だ。

『舌の先から漏れる樣な人の慰めの言葉は却つて私を悲ませます。私は信仰を攝んだと申しました。併しそれでは未だ此荒み切つた私の心を滿足させる程厚くはなつてゐないのです……音樂も運動も爰に至つて何等の價値のないものになりました』と自責してゐる彼は更に自分をも疑つてゐた。『自分は總ての過去を聞いて見たかつた。自分の亡びた才能の行方を聞いて見たかつた』と言つてゐる。あの强い自尊心を疑ふ程に悲觀したのだから試驗は罪だつた。

戀愛問題に興味を感じ出したのも、私が彼と交つてからだ。彼は異性に對して眞面目だつた。彼が此頃生んだリーベスアフエーレも一場の悲劇に終つた。彼に言はせると『彼女の爲に私自身の幸福の爲に』退却しなければならなかつたのだが、彼は亦『然し私は彼女に感謝してゐます。彼女は私に試練を與へてくたから』とも書いてゐる。私はもう此以上書きたくない。それは餘に彼の傷に觸れすぎるからだ。唯彼の態度が稱揚すべきものであつたと告げればよい。

北大の入學試驗にパスした當時は、盲腸炎で入院してゐた。私が東京へ着いて早速尋ねた時分は未だ病舍に寢てゐたが一高との競技會の日には杖にすがりながら見に來てくれた。試合は敗けたが彼が病後の身体を引づりながら來てくれた事は私には何より嬉しかつた。

＊　＊　＊　＊　＊

彼が北海道へ行つたのは京都を避けたかつたのとスキーがやりたかつたからだ。北海道へ行つた頃は一人で淋しかつたらしい。行つた當時の通信に『私はやつぱり札幌から出發しませう』と云ひ『こちらに居て僕の氣持を知つてくれるのは先生位のものだ』と云つてよこした（一二、八）時分迄は隨分と困つた樣だ。

『神は私を三年の試練に依つて救つて下さつたのだ。自分は神に感謝せねばならぬ。自分はこゝ迄書いて來て桃色の幸福を感ずる』と言つてゐる處に、彼の性格がうがゞはれる。『私が一高へ入れずにこゝへ來たのも辛か不幸か考へれば考へる程全く見當がつかない』と云ふ彼の言葉は私に異つた意味に於て全く見當がつかないと歎息せしめざるを得ない。

『自分が淋しく孤獨にある時こそ常に反省が施され且自分の一番強い時なのである……今自分は強く生きて行くために孤獨を求めようとしてあせつてゐる』こんな思想が正しいか否かは別問題として彼の性格の一面はよく出てゐる。然し彼は又其半面に騷ぎ廻る樣な野次氣質を充分に持つてゐた。此互に表裏する性格が彼の本質であつた。此矛盾が彼の性格だと云へよう。強いて孤獨に浸らうとするかと思へば友達を求めて轉々として歩いた彼、交友の多かつたのも皆爰に起因してゐると思ふ。

現代人の惱、信仰を得ないものゝ動搖は彼をのみ例外の中に置いておかなかつた。否寧ろ彼に於て潛勢的ではあつたが力强く動いてゐた。彼の矛盾は非難の焦點となつた事もある。そして私自身でさへ其露骨なる表現を憎んだ事がある。然し此矛盾こそは彼の本体であり彼の本質だつた。私は其同じ樣な傾向を私自身の中に見又私の周圍に見る時彼を責める事は出來なかつた。

人格の分裂（もしもそんな言葉が許されるなら）は現代の一般的傾向だ。唯彼の性格が强くそれを表現したにすぎない。私をして言はしむれば彼の矛盾の中に彼を最もよく觀念する事が出來る。

『家庭的な交渉に目を閉ぢて研究に沒頭しよう』等と言つて北海道へ行つたが家庭を離れると却つて强い愛着を家庭に對して持つた。そして入學試驗の準備をして居た時代とは反對に家庭の事を一層心配する樣になつた。通信のある毎に家庭の事が書かれてゐない事はなかつた。彼は後年お母さんに抱いてゐた感情なんか考へるともつと生かしてやりたかつた。『昨日母から手紙を貰ひました。安さん實に嬉しかつたよ……何でもない事にも獨り涙が出て來ます』と迄言つてゐる。北海道で充たされない不滿を家庭か

ら見出さうと努力した。だがその直後に『もしそれが戀人の手紙だつたら何んなものでせう』と言つてゐる。彼の性格が浮彫の樣に出て來る。

そして彼は不幸にも其戀人の手紙を獲ずに死んでしまつた。然し彼の頭の中で描かれてゐた彼の所謂夢の國には既に女王があつた。然しそれは私達の窺鑿を許さない。私は唯彼の爲に祝福したい。彼がユートピアを夢みて死んで行つた事に對していや口惡く云ふなら幻滅の悲哀を經驗せずにすんだ事を、然も惜まれながら行つた彼は多幸だつたとも云へようと思ふ。

彼は小說なんかは餘り讀まぬ方だつた。漱石の明暗などが好きな小說だつたと記憶してゐるが、繪畫ときた日には分らぬと云つた方が間違がない程だつた。

人生の目的は何だ？と云ふ疑が彼の心に巢食ひ出したのは北海道へ行つてからだと思ふ。懷疑的になつたのは自分で科學を勉强し始めてからだらうと思ふ。然し何の程度に迄疑つたかは私は知らない。

『色々の事件に出遇つて少しづゝ鍛はれ私の樣な冷い人間に迄假令薄々にしろ信仰の力の奈邊にあるかを知る事が出來る樣になりました』と言つて居るが彼の神彼の信仰が如何んな意味を持つてゐるか私には斷定出來ない。私は未だ所謂神に、信仰に彼が到達したとは思へない。神に依つて桃色の幸福を感じてゐる彼には何の程度迄宗教か問題になつたかは疑問だ。唯彼が絕對的な無神論者でない事と有神論者でない事だけが肯定出來るに過ぎない。

去年の夏は何だか餘り逢はずにすんだ樣な氣がしてならない。それでも隨分遊び廻つたそうだが何にも記憶に殘つてゐない。彼は去年始て芝居を見た。それ程彼は芝居通ではなかつた。

同じ夏北海道へ歸る前々の日だつたか南禪寺の山門迄行つた時『別所にもう一度逢ひたくなつたから又歸つて來た』と言つて南禪寺の宅へ戻つた來たそうだが妹がだゞをこねて一日歸らせなかつたりして何でも三日程出發を遲らせたが、今から考へると何だか暗示であつた樣な氣がしてならない。

『山で死ぬかも知れぬ』と言つて山で死んだ彼は淋しかつたらうと思ふ。

唯私は最後に彼の死にも拘らず北海道の山とスキーとが益々發達せん事を望んでやまない。それはやがて又故人の意志だと思ふ。

思ひ出

伊藤秀五郎

藤江は全く運が悪かつたのだ。運が悪かつたといふより外仕方がない。若し彼がうけた傷がもう一寸どつちかに寄つてゐたら、今頃はもうその傷跡も癒えて了つてゐたであらう。

彼が何に依て眼を傷けられたかは、明確には解らない。彼はその日ニセコに登つた初班のリーダーだつたので最後から降りて來た爲に、彼が負傷した刹那を目擊した者は無かつたし、全く瞬間的の出來事だつたので、彼自身にもよく解らなかつたらしい。しかし班員の言葉から察するに、ニセコの第二の峯近くで、白樺帶の上だつたといふから、多分轉倒した際に、スキーの尖端かシュトックかで、左眼を傷けたのであらう。直ぐに繃帶して自分で麓まで滑つて下りた。その時丁度大野部長や醫學部の志賀教授などがテレスの上におられたので、早速應急の手當をして、温泉までは皆で援け合つて歸つた。そしてその夜、直ちに札幌に歸つて、大學病院に入院して治療をうけた。然かしその時は誰しも、これが原因してあんなことにならうとは考へてゐなかつた。事實傷そのものは、悪くいつて左眼を失明する程度のものであつたのだが、急に腦膜炎を併發して、二三日のうちにまつたく容体が改つて了つたのである。

藤江は全く運が悪かつたのだ。いつもあまり天氣に惠まれない冬の合宿が、今年は始めから素晴しい快晴で、容易に姿を現さないニセコアンヌプリさへも、毎日くつきりと澄明な蒼空にスカイラインを描いてゐた。それにいつもなら、クルステがスキーの角付を拒む頂上附近も完全なプルフエルシュネーであつたので、毎日いくつかの班が三角點を踏んでゐた。その日もまた風はなく、雪は不相變良質で先に登つた班のシュプールを、藤江の班も登つたのであつ

た。そして滑降に移つて間もなく、彼が轉んだ時運悪く負傷したのである。そしてこの樣な怪我は、吾々日常の動作に於ても屢々起り得るものなのである。

彼はほんとうに運が悪かつたのだ。

山へ行く時私達はいつも一緒であつた。私達の仲間が彼からうけたものはかなり大きい。皆が集る度毎に彼が缺けてゐることの淋しさを新にする。殊に彼は、山については私などよりずつと先輩であつたから敎へられることも多かつた。

十二月の合宿から歸つてから、仲間の者達で黑岳の登山小屋に行く豫定であつた。此の行については、私達はどんなにか緊張を感じ合つたことだたらう。食料、燃料等の大半は夏のうちに上げておいた。そしてその他の準備もすつかり出來てゐたのに、一緒に行けなくなつて了つたことは殘念でたまらない。せめてシェンクのピッケルだけでも一度使はせたかつた。

彼と私との交際は、お互に札幌へ來てからの三年間の短い年月ではあつたが、私達は唯單に山へ行く時ばかりの友達ではなかつた。私達はお互によく理解し、敬愛の友情をもつた心の友達であつたのだ。少くとも僕は彼を理解してゐる一人だと信じてゐる。そしてそれに一つの誇りをさへ感じてゐるのだ。何故ならば、彼が人生に索むるものはまことに眞摯なる生活そのものに外ならなかつたからである。彼も亦未だ修養の途にある一介の書生である以上、その人格こても勿論完璧無缺とはいはれないであらう。しかし彼は常に、安逸と懶惰と愚劣とを極端に嫌惡して、聰明と知識と崇高威正なる人格とをこの上なく尊んだ。そしてまた高尙典雅な風格を具へてゐた。

若し彼が、より長く生をこの世に享けることが出來たなら、彼は將來立派な科學者になつたであらう。勿論彼は、地位と名聲とに汲々としてまこゝに貢獻するこころ無く、自ら内に何等高き人格の完成を努めない、衒學者流は最も忌嫌する一であつた。生活の總てを擧げて學問に沒頭するのは彼のたゝざる心願であつた。而も遂に人格の完成こそは彼の最終の目的であつたであらう。私も生涯學問を友とし樣としてゐる故に、彼の學問に對する心持はよく解る。勿論その樣な生活は彼にとつては最上のものではあつたがしかし、それを以て直ちに人間至高の生活であると速斷する如き偏狹な見解は彼はもつてゐなかつた。學者の――或は藝術家のまた宗敎家の――その生活に對する精進についての一般人の無理解さに對してさへ、あまり不滿を感じてゐなかつた樣である。

私が彼とゆつくり話した最後は、昨年の八月の末近くに彼が京都へ歸る途中横濱の根岸の私の家に寄つてくれた時であつた。二人で弘明寺に三田君を訪れたが留守であつたので街をとりとめもなく逍遙した。彼が好んでゐた海岸通りも特異な支那人街も、山手一躰へかけての居留地も、未だ荒廢の姿であつた。ただ本牧から根岸あたりの極めて變化に富んだ、僕の所謂ゴッホ風の丘陵地は少しも傷けられてゐなかつた。この邊は僕の大好な處で一日に一度は必ず散歩したところである。僕達はある松林の草原の上に寢轉んだ。そこからは穩かな東京灣の風景が瞰下され、また異人等の戯ぶボールの響を澄明な秋の午後の空氣に聽いた。そこで私達は色々のことについて話し合つた。また形而上のこと、內的方面のことなど、例へばお互の人生觀とか、戀愛觀とか、山に對する考へといつた樣なことを話した。その頃私は人生のまことの姿相——醜き半面の——を漸く知つて來ると同時に、人生に對してかなり明るさをもつた希望を失ひかけてゐた時なので『名聲と地位と權力と嫉妬と奸智と詐欺の修羅場であるこの人間の世界がいやになつた。生涯世界を飜然とさまよひたい。かのトローや長明の樣な俗事と何んのかかわりのない森林や山中の生活がたまらなく懷しくなつた』といつたら、彼は『その樣な隱遁的な厭世的な生活は、僕にとつてはただひと時の小さな安心を與へるばかりで、やがてそれにつづいて起り來るものは耐えられない倦怠のみであらう。少くとも僕には、力强い生活が必要なんだ。僕は永遠にこの若々しい生命の泉を枯渴させたくない』といつた。彼のいふ力强い生活といふのは自らの力を誇稱し樣とするそれではなくて、一歩一歩確實な歩みを續けてゆく努力の生活なのである。

僕の家は根岸でも最も邊鄙な處にあるのだが、それがかへつて彼の氣に入つた樣であつた。座敷の『壽而康』といふ鐵舟の遍額と大雅堂の山水とが大變いいといつてゐた。彼の趣味はそんなところにまであつた。彼が京都の地を好んでゐたのも、そこで生れて生長した爲のみではなかつたのである。目先の賑々しさにのみ生活の安慰を見出さすよりは、寧ろ彼はまた、靜かに自己の內心をみつめてゐたかつたのである。

札幌に歸つてからは雜務に追はれて每日の樣に顏は合せてゐながらゆつくり彼と話す機會を遂に得なかつた。今から想へば、未だ話し殘した樣なことが澤山ある樣に思はれてならないのである。

こころ知れる友の臨終の夜
枕邊に集へる友ぬちら
あるは悲しみに肩うち震はせ

あるは底う頸垂れて嗚咽をのめるに
われ一人泪に渇れて
天井を仰げり。

ああこの短形ける四壁の白さ！
われそこに七彩のあやしげなる鳳をみたり。
またわれたちて
蒼然と重苦しく密閉めるカーテンを開けば
いつかかの妖雲は散じて
白光の星煌けり。

ああ何んたる透徹ぞ
今宵わが心遠く遠く
白銀の山波のかなた幻想の世界に於て
安眠へる
こころの友をたづねんかな。

藤江永次君に關する文獻

オトブケより石狩岳へ　（本誌三〇號）

五月の奥山盆地　（本誌、三九、四一、四二號）

峠

大島亮吉

4

今度は、現實的に峠そのものに就てみると、峠にはいろいろのものがある。そしてそのいろいろのニュアンスをもつて山にのぼるものや旅するものゝ心を惹く。

人事との古くよりの交渉や、或ひはある特に著しい歴史的な背景をもつてゐることに於て、その峠を越えてゆく旅人の心に少なからず興味を與へてゆくものがある。例へばその顯著な例としては、かのカルタゴのハンニバルがアルプスのある峠を越えて羅馬に侵入した歴史の上の名高い出來事である。ウエスターン・アルプスの峠を越えてゆく登山者の心にも旅行者の心にも、想ひは遠い過去にさかのぼつてその當時をおもふと共に、一体ハンニバルはこの數多い西アルプスのどの峠をこえたのであらうかといふやうな疑問をもつに至つて、ある登山者などは熱心にこの歴史上の異論多き一つの問題を研究して、終ひに最も決定的な考證を與へたものがある。それはあの高名な登山家ドグラス・フレッシュフィールドがアルパイン・ジャーナルに發表したこの峠路を主題とした研究論文「ハンニバルはアルプスのどこを越えたか」(Where Hannibal crossed the alps? Alpine Journal, XI. 267.)である。歴史家は皆この研究の結果として、その峠路はアルプ・マルティームのうちの、バロチエロネッテとキユネオとの間になつてゐるコル・ド・ラルジャンティエールであるとしてゐる。このやうな例は勿論極めて顯著であつて殆んど他に類例はないことゝ思はれるが、如何にある登山者の心に對しては、單

なる峠の史的興味が甚大であつたかが窺はれる。北アルプスのあひだを信越につなぐ古い、そして我國ではまづ最高であらうと思はれる峠路として佐良峠と針の木峠なども、その佐々成政の史實からみても、また古い兩國の交通路としてみても面白いものである。けれど個人的には私はそんな史實の名高いものと關聯した峠の史的興味にはあまり心を惹かれない。この歴史的な峠に對して、全くたゞ地方的な、山間の小さな山村と山村とのあひだの、めつたに他國のもの、旅行者などの通らないやうな峠がある。Native pass といふのがこれなのだ。勿論それとても、單に人との交渉のあつた歴史としては古いかも知れないが、それはたゞその土地に古くから住んでゐた人々にのみ知られてゐたにすぎない、無名の峠であることが多い。旅人の心は、このやうな遠い山間避地の人通りも稀れな峠の道をのびのびとおのが影をたのしみ、一人の運命のぐるりを眺めながら越えてゆき、その谷と谷とのあひだの村に育まれて、そのまゝそこで終つてゆくやうな變化のない固定した生命の營みや、その外形よりは擾されることのすくない靜安な生活の風景などを垣間みつゝ過ぎてゆく一種の旅情を誘ふ峠である。私の好きな峠はこれである。かゝる種類の峠こそ、今日もなほ「峠越え」といふひとつの特別な山登り（廣い意味での）のフォームを形づくるになくてはならないものなのである。私としては、かゝる峠を越え歩くことを山の頂に登ることゝおなじやうな愛着をもつてみてゐる。

山地のあひだにある峠は、多くはみんなそのやうな類ひの峠である。私としても、東北の、主要な交通路をはなれた、小さな低い山地の間の數多くの峠、秩父の前山や秩父裏の上信境ひの低山地のなかにある小さな峠に、「峠越え」として最も興味の深いものをもつてゐる。

それからこゝに峠らしい峠といふのがある。それはどんなのかといふと、まあ漠然としたものだが、私等に峠といふとすぐ心に浮ぶやうなそれほどチピカルな要件をすつかり備へてゐるやうな峠のことである。だから峠らしい峠なのだ。はじめはごくゆるやかに登つてゆくが、その頂上近くになつては、道がヂッグザックをしてゐて、汗を流しつゝやつと頂上につくこと、昔から峠にはつきものゝ「峠の茶屋」があつて、そこのお婆さんが早速澁茶をくんでだす。頂上の見晴しはよく、いま登つてきた谷も、またこれから降りてゆく國の平原もすつかり見へるといふ寸法、要するにそんなやうな峠をいふのである。こんなやうなものゝ本でみるやうな峠だから、たくさんにありそうなものだが、しかし歩いてみてそうたくさんないのに意外を私は感じた。現在日本にはあまりに徒歩の旅行者はすくないのぢあないかとおもふ。だから「峠の茶

屋」などが、なかなかみあたらないのだ。古い峠路！それはまだ文物もすゝまなかつた古い時代からの長い勞苦と必要とにせまられて、いろいろの人々に昔から踏み馴らされてきた足跡の名殘である。この古い峠道などのもの深い寂びやうは何んとも説明できない。ひとつの古さの愛らしい風情だ。路上のでばつた石などは、永い間の人々の草鞋の踏みつけで全く圓くすべ〳〵に磨りへつてゐる。私はこんな古い峠もまた好きだ、古い時代から近代まで他國との交融のために、人々がひたとその峠路とその生活とをくつつけてゐたやうな峠はよろこんでこえる。その點で私はアーケイストだ。

今度はそれに對して峠らしくない峠がある。登りはごくゆるい。徑の兩側は深い森林だ。はじめは流れをさかのぼつてゐたのだつたが、いつとはなしにもう流れについて下つてゐる。何時のまにか峠の頂上は越えてしまつてゐるのである。それほど登りも下りも傾斜がゆるいのである。勿論峠の頂上もわからない位ひだから、頂上の眺望などもありやうがない東北の小さな峠にそういふのがあつた。

5

峠ひとつを境にして此等と向ふとの氣候や風土のちがふ時の、その峠越えはまた一種特別の情趣をもつて私等を惹く。ことにそれが暗い國から明るい國へ、寒い土地から暖かい土地へと越してゆくときはなほさらだ。「越路の人は、寒空に信濃へ連る山々を見て、あゝ、あちらは明るいと思ふとか。彼らは誘はるゝやうに、山を越えた。」といふのは、これらの土地に住む人々の心情を言ひ表したまことのものだと思ふ。冬、信越線を通つた汽車旅行者でさへ、誰れしも越後から柏原のトンネルを過ぎて、長野あたりまでくると、いままでの沈鬱な灰色の雪空が、急に透徹した冬の濃い蒼空にかはり空氣の鋭く爽やかに冷えてくるのを氣づくだらう。それからまた、「甲斐の人は、御坂を越え、籠坂をこえ、狹い道を駿河や相模と南國に來た」と。屋根に置く霜も白い頃、都會の冬を出でて、あの雪のうす斑らの天城を越えて、奥伊豆へとめざしてゆくものの心は、そこの海邊近くの丘つゞきの黄ろい枯草の斜面にあたゝかく光る日の光りや、紺青の水平線、色づいた實もたはゝの密柑の樹林や紅い椿の花の咲く日當りのいゝ村景色を夢のやうに描いてゐるにちがいない。バヴァリヤの森のあひだの平和な小村に住んでゐた若者が、南西にそこの村から望まれる遠いシュワイツの雪光る山々を越えたその向ふの明るいイタリヤの空をおもひ、ミニョンの歌に知るところ、オレンヂの暗緑の葉かげにかゞやき、大理石の

圓柱の空に聳える殿堂のあるイタリヤをあこがれて、旅にでたといふ話の氣持と、それはよく似てゐる。シユワイツの生んだ名高い抒情詩人コンラート・フエルヂナント・マイエルは、彼れがあのベルニナの峠をイタリヤへと越した時のことを歌つたひとつのリリークは、よく私らの胸さへひゞくものがあるだらう。それは「ラ・レーゼ」といふシユワイツからイタリヤ側へとベルニナを越すと、最初に見へるといふ伊太利の小村について歌つたものである。

ベルニナの岩の門を
馬車はごろごろと通り過ぎた
さうして私共は南の方に
貝山の聳え立つてゐるのを見た、丁度、その時
先きの馬の上の革のズボンの男は
とててと喇叭を吹いた——
「お前は誰れにその喇叭で挨拶をするのかね？」
「へえ、ラ・レーゼでさあ、お客様、ラ・レーゼでさあ！」

平らな屋根をもつた圓柱の家、
先づ眼に入つたイタリヤの像、
ラ・レーゼは葡萄の蔓を身に纏つて
とげとげした岩の荒地に薔薇と咲いてゐる——
何だか此處の水は他所よりも
柔かな音をして流れてゐるやう
ラ・レーゼのバルコンは
遠くイタリヤを見下してゐる。

私は北國人、又も南の國に

彷徨ふ事が出來る
あの私の岩の四壁を
この白い大理石の廣間に代へて、ね、
今日は、イタリヤ、光り、よろこび！
私も運のいゝ男さ！
イリタヤは私達の地球のチョッキに着けた
薔薇だ、イタリヤ、薔薇だよ！

— ラ・レーゼ、藤森秀夫譯 —

このやうなも實に旅情ゆたたかなものである。「峠越え」をする心持のうちには、こんなやうなひとつのあこがれと好奇の心とがその主要素として加つてゐるとおもふ。まだ見ない、まだ知らない土地のすがたに對してのつよいあこがれと好奇の心、それだけのものさへして、人は山を越えてゆく苦しい旅をする。ましてその上に旅の自由さきまゝさ、狹い自らの人生を解放して、思ふがまゝによろこび、寂しむことのできる旅の心を求めるものには、旅の辛勞、不安、などはまつたく影さへもないものとなつてしまつてゐる。田山花袋の紀行文を讀むと、その青年時代にはよく東北のその頃は旅人の通るのも稀れな峠路をひとりで、青年の客氣に任せては越え歩いたことを偲んだ想ひ出がある。氏はたしかに旅人の心をもつてゐる。私には、この峠を越えた向ふにはどんな土地があるのだらう。あの峠さへ越せばそこには自分の求むるものがあるだらうといふやうな、單なる好奇と憧憬に導かれてゐる旅人の純情をなつかしくおもふ。「遠い地平線の淡青む山々の向ふ、青い花の物語をさがし求むるために、背嚢を背にして廣き地上の旅にさすらひ出でた」と歌つた十九世紀の獨乙抒情詩人のその心情をなつかしむのである。そして、それと同じく、私には「寂人芭蕉」のあの笠一かいの佗しい旅の心境、永遠のワンダラーとなるべく、放浪の旅に出でその後半生を風と雲のなかに沒してしまうことを希つたヘークのその箴言もともに私にアッピールするところは大きい。まつたくむかしの日本人は生涯かかる旅をゆく、もつとも自然の旅を愛したのだ。ブラッイデウス。ハルトマンのいつた Wanderspruch をばこのセクションの終りに置いてをこう。「額

は高く、そして眼と心とは生々とした視線をもつて日にかゞやく、幸福な國へと擴がつてゆく！　自然がわれ等のぐるりに美しくひろげたものこそは、父なる神の手づからの贈り物なのだ」

6

この夏晩く、八月の末から九月のはじめにかけて、夏と秋とのあはひの時節を、久しぶりにたゞひとり裏秩父からその上信の境ひにまたがつてゐる複雜な低山地のあひだに、たゞ峠から峠をこ歩きまはつた小旅は近頃のきよらかな印象であつた。もとより私は以前からこの「峠越え」に對する自分の個人的な好尚の赴くがまゝの山歩きもすこしはしてゐたが、このたびのやうな殆んどまつたく「峠越え」のみを目的としたやうな山旅ははじめてである。街道になつてゐる大きな峠、國と國とのあひだの高い山の峠、村と村とをつなぐ「里道」のほどよいのんびりとした歩き加減の峠、地圖の點線の小徑で記された名もついてゐないやうな小峠、さてはもう土地の人さへもめつたには通らない、草ぶかい廢路の峠。それらの大小いろ／＼の峠を私はほとんど三十に近くこえたことになる。そして山といへばたつた金峯へ登つたきり。それも途中まで一緒に歩いたひとりの友達にひつぱられて登つたのだつた。この「峠」の旅で、私はこれまで私の氣につかなかつたやうな一つの旅――むしろ山歩きのと言つてもいゝ――の、自分には新しい分野を見出して、ひとりでよろこんだ。私はホームズといふ人が「ヒル、ワンダリングの心理」といふ一文のなかで言つたやうな、主として低い山々の間の峠などをこえ歩いて、そこにひとつの穩かな、しつとりしたたのしみを見出してゐる所謂ヒル・ワンダラーの心の動きを仄かながらこれによつて感じられたやうな氣がする。といへば、いかにも私もひとかどのヒル・ワンダラーになつたやうにきこえるかも知れない。しかし私はなにもそういふ意味のものはもつてゐない。そして私には、心情ゆたかな、自然に對して敬虔の誠を失はぬ。ほんとのヒル・ワンダラーの、まことの旅人の、自らの影ゆるやかな興味に浸つて、彼れ等自身の感情と夢とを思ふがまゝに遊ばせて、その行程をさまよひ歩いてゆくその心を理解することの出來ないひとりかもわからない。私はより高い、より新しい、より困難な峯々の頂に立つことをもとより絶えず求めてゐる。求めてやまないだらう。友よ私らはあくまでそのためにつとめていゝ。けれども求めてその得らるゝことは極めて望みすくなく、わづかだ。時折りのそのやうな緊張した、力ある山登りのそのあひまに、また私らのうち、心ひかるゝものは、このやうな山歩きのひとつの

すゞやかな思ひにゆくのも悪くはないだらう。時間と物質に無理算段をつけたより大きな山登りをするくらひなら、私はその時々の身に應じた山登りでも山歩きでも、またはわづかの散歩でもした方が、餘つ程自分の心をふくらませ、新しい呼吸をさせることができるだらうと思つてゐる。精神的からみても、物質的にいつても、それがその身に相應してゐるといふことが、私らをして心安らかに遠慮もなく、人目もなく登らしめ、歩ましめるものであると思ふからだ。そのことこそそのものにとつてのほんとうの心と身との糧となるものだ。

こんだのその「峠」あるきでは、十石峠と内山峠とのあひだにたくさんある、村から村へとつゞく大小峠に興會多いものがあつた。一日に三つぐらひは越せるものもあるが、なかには小さいけれど、路の悪くて、歩きにくいのもあつた。そして私は上州よりになつたその山地のあひだの村々をみて歩いた。鹽山で汽車を下りて、横川でまた汽車にのるまで、中央線と信越線のあひだをほゞ後もどりをしないで甲武と上信の國境沿ひに歩いたのである。こゝでは書いてもプロゼイックなその行程の記述はさけるとしよう。けれどそんなやうな峠歩きにふさはしい、そして自分にとつて好ましい峠のあつたころなどについて書くことはあがなち全然この場合に除くべきでもないだらう。

私として、これまでのわづかの知識では、東北地方一体の山地のうちにあつた峠に最も心に殘るものが多いやうである岩代と常陸との境ひで八溝をまんなかにした低い山地、吾妻山群と飯豊とのあひだ、飯豊と朝日との間、朝日と月山とのあひだ、鳥海の後ろの高原狀の低山地。北上山地の一部、それらの諸山地のほかに東北を通じてその背梁山脈を日本海岸から大平洋岸から横斷してゐる大きな、長い峠には、田山花袋も書いてゐるやうにまつたく面白いものが多い。栗駒のあたり、駒ヶ岳の附近、八甲田の裏手などにいゝ峠がある。たしかに背梁山脈を横斷するだけに、峠は長い。それでか仙岩峠といふのには「お助け小屋」といふのが三ヶ所にも置いてあつて、年中そこを通る旅行者のために備へてゐた。ちよつとアルプスの峠の修道院のことを想ひ出させるものがあると思つた。それにひきかへ、前にあげた諸山地のあひだの峠は低い、人通りの稀れな村の峠である。小さな山のあひだの廣土の町と狹い谷あひの小村とに通ずる小峠である。越後の平野と會津の山地との間にある「六十里越え」だの「八十里越え」だのといふ名の峠は、私はまだ知らないがどんな峠なのだらうか。これは本州の背梁山脈をこえてゐる長い峠なのだか、その街道の道程の長さから來たらしいその名の起りも往昔の旅人がそのゆく道程の長さ、辛勞を口ぐせにでもしてから終ひにはそのやうな名もつけられたのではあるまいか。

私には名をきいてさへ越えてみたい峠だ。その他に私のいまだ知らず、そして話にきいてゐて、いつかゆきたいと思つてゐるのは、岩手の大平洋岸に向いた低い起伏の多い高原地のあひだにある峠である。それもずつと北東寄りで鮫港と宮古とのあひだの山地である。先年私の目上の友人松本信廣氏が柳田國男氏と共にフオウクロアの研究のために約一ケ月も歩かれたが、そのときの話しによつて、私はあのフィヨルドのやうな深い入江と斷崖つゞきで、濱茄子の佗しく咲いた海邊に沿ふての一村ごとにつゞいてゐるといふ峠のことや、またその海邊から陸地へつゞく遠い邊阪の荒地のあひだの我國にはめづらしいほど貧しい農民生活をしてゐる村々のうちをつなぐ峠のありさまなどを久しく心にえがいてゐる。そこは日本の愛蘭土だそうだ。そんな民俗學的な興味をはなれても、たしかに私の行つてみたいところだ。階上岳のやうにそのわづかの高さですでに偃松と岩石の多いヘザーランドの頂を髣髴とさせるやうな山頂さへもがあるに於ては。

會津山地から奥上州にかけては、いゝ峠も山頂とともにあるが、私はいまだそれを語るほどの實際の知識はない日本アルプスには全体にみて私として好きな峠のないのは遺憾だ。わづかに中尾峠と、いつかこえた飛騨の和佐府村から有峰へ通ずる土地の人の峠だけである。南アルプスの南半にはいゝのがありそうだが私は知らない。秩父の峠は殆んどみな私には面白いものだ。そして殊にいゝのは、その奥秩父の高い、大きな峠よりもむしろその前山や山麓の小さな峠だ。茅ケ岳の背後から金峯にかけてのあひだ、鹽平の村のぐるりなどにもいゝ峠がある。それから多摩川と相模川との間の低山脈のうちにも、その古めいた路の陰影のやうに、おなじく匂はしい峠がある。北海道についてはごくわづかしか知らないが、心に殘つてゐるのは北見峠である。

峯の頂にのぼつた時のことよりも、旅といふやうな氣持の伴ふものに自ずと惹き入れられてゆくのが、私の常である。これは單に私のものばかりとは云へないやうな氣がする。どうしても「峠越え」はワンダリングの領分にはいる方が多いよく古い熱心なピークハンターであつたマウンテニーヤの紀行などを讀んでも、その峯をはじめて登攀したといふときの敍述と始めて峠などを越えて見知らぬ國土のうちを歩きまはつたといふときなどの敍述との間には、よくその二つの氣持の相違してゐるのが窺はれる。それは面白いことだ。しかしアルプスでは今は餘り峠越えはやらないことは前にも述べた通りである。わが國のごときも山が少なく(土地の廣さの割合には非常に多いけれど)土地も狹いのと、それに非常に開けてゆくのがはやいので、私らにはもうこのやうな峠越えなどをしての面白い場所は、夏にはすでに前にも書いたやうに、

岩手の太平洋岸の低い高原地か、北上山地、東北背梁山脈のある一部、北海道の一部ぐらいしかないやうに、私には思はれる。けれども、また新しい方法としてはスキーでの峠越えである。ある地方の山を登る前には、その前に積雪の狀態や天候その他のことを知るためにも、また純然たる旅行の目的ででもいゝから、方々をスキー旅行をして「峠越え」をやるのはいゝことであると思つてゐる。こんなことは知つてゐて、これまで仲々出來なかつた。スキー登山の傾向の早くに行はれたのに反して、スキー旅行の傾向がちつとも進まないのは一体どういう理由であつたらうかと此頃漸く氣がついて來た。「峠越え」も、夏や秋に越えたときと、冬や春のはじめの雪の深いときにスキーで越える時との間には可成り相異したものがあるだらうと思はれる。長い平地滑走の味のわかるのもスキー旅行が主だらう。

私はこの記述では「峠」についてのいろいろのことを書いたと同時に、純然たる山登りからすすこしく離れた旅のこと——旅といふ言葉では充分に言ひ表してゐないとすれば、ワンダリングといふ語を借りてくるより仕方がない——を書いた。その目的は「峠越え」を主題としてその旅のことと、純然たる山登りのことゝの間の關係を觀たかつたからである。

第三回スキー選手權大會感想

ディスタンスレース

岡村源太郎

大日本体育協會主催の全日本スキー選手權大會も、回を重ぬる事既に三回、その間幾多のルールの改正、競技種目の變更等があつて、今年は可成合理的な國際的な方法で各種の競技が行はれた。之につれて出場した選手の技倆も非常な進域を見せて、我が國一般スキー界の發展を明かに示しつゝあるやうである。

殊にコースに就いては、スタートとゴールが同一地點に置かれた爲に、出場選手としてもその練習の上に甚だ便益多く、競技當日阿闍羅山の方までスタートを切る爲に登つて行く等の事がなくて非常に樂であつた。又競技委員の手數の省け方は選手以上であつたらうと思はれる。

ディスタンスレースの距離は短中長全て長くなつて、四キロ、一〇キロ、一六キロ及び一六キロリレーとなつたが此の距離の延長はスキー界の發展と共に當然の事と考へられる。長距離の雪上に於てこそスキーの眞價が發揮せられるのである。一キロや二キロのレースでは充分なる登り降り平地の三斜面をコースに入れる事は到底出來ない。丘一つクロッスしたゞけでも二キロ位は直く過ぎてしまふのであるから、せめて選手權大會では一〇キロ位走らねばクロッスカントリーとは云はれまいと思ふ。

競技種目は猶四種目もあつたが、之は一種目乃至二種目で充分である。一体スキーレースでは、短距離に早いランナーは必ず長距離にも早い。現在世界一のランナの稱ある諾威選手ハウクは、シャモニーで五〇キロ及び一八キロに一等を獲て居り、その他の有名選手なるゲロッタムスブラーテン、ニク、ストロムスタッド、ランドブイク、マール

ダーレン等は短であらうが長であらうが成績は殆ど變りがない。陸上で百米一等を取つたが二百米で選外であつた等のやうな事は、スキーのディスタンスレースには絶對に無いと云ふてよい。今度の大鰐の大會でも四キロの一等の早大高橋君が一六キロに三等であつたが、若し高橋君が四キロに出なかつたら、恐らくもつとよい成績で勝てた事であらうし、又他の選手で一〇キロ優勝者を短距離にまはしても、やはり立派な成績を擧げる事が出來たに相違ない。陸上では短距離ランナーミマラソンランナーは極めて確然たる區別があるが、スキーレースでは短距離に早い者即ち長距離に早いとして差支へない。

從つて競技種目は一つで充分である。多くとも短と長の二種目以上にする必要はない。西歐の選手權大會にも、リレーや二種目以上のディスタンスレースをやつて居る所は殆ど聞いた事がない。之等の點は他の陸上や水泳等と餘程趣が異つて居る事を注意しないと、數多くの競技は結局無意味のものとなる恐れがある。將來スキーレースが一日一競技開催と云ふ手段に依つて行はれた時には、短中長の優勝者は恐らく同一の人であり、その他の入選者も殆ど變化ない事が屢々起るであらうと思はれる。今年の大會でも、四キロ、一〇キロ、一六キロを各々日を異にしてレースを行つたならば、松田、高橋、中川の三君は何れにも相並んで勝利を占めたに相違ない。

次に今度の大會のコースは登りコースであつた。降りコースと稱せられた四キロでさへも、二〇分以上の時間を要する登りの比較的多いコースであつて、從つて後述の如くタイムも甚だ好くなかつた。之は登行斜面が緩く長く續いて居たのに反し、降り斜面が急で一瞬の間に過ぎてしまつて、緩い降り斜面の少かつた事に起因する。一言すれば登りにも降りにも滑らないスキーガ有利であつた。或は登りに後滑りをしながら登つて、降りには折角の速やかに降るべきスロープを制動しながら降りて來た。と云ふ事が出來る。又レコードの惡かつた事は雪質の不良にも原因するけれども、急な登降斜面でのレースは決して良好なレコードを望む事は出來ないのみならず、滑りの惡いスキーが甚だ有利となるものである。之はあのコースに強かつたランナーの走法を見ても直ぐ察せらるゝ事であつて、所謂諾威式のノンビリした走法は確かに不利であつたに相違ない。コースに對するレーサーの走法の對策は重要な事であるが、大鰐に於けるコースを標準としてのレーシングテクニックを研究する事は些か無駄になりはしまいかとの感が覺かれる。

又前述の事柄は一〇キロコースの最高點が四〇〇米以上の地點に存した事にも原因するが、コース中の最高點はな

るべくそのコースの距離に相應した高さであつてほしい。シャモニーの五〇キロでさへ一〇〇〇米以内であつたのであるから、一〇キロでは二〇〇米以内で充分であらう。一〇キロレースが登山競走と稱せられたのも無理がない。

勿論登り降り平地各三分一づつとの割合は殆ど破られてしまつて、一〇キロにせよ一六キロにせよ登りが五分位になつて居た、登り二分と定められた降りコースの四キロでさへ登りは殆ど二キロに達して居た。即ちコースの選定法猶一段と研究する餘地があると思はれる。

然し又一面に大鰐の地形をよく觀取するならば、彼地にスタート及びゴールを同一にして登り降り平地を同樣に含むコースを求むる事は可成困難な事かも知れない。此の時にはスタートをゴール附近に置く事に餘り拘束せらるゝ必要はない、練習に甚しい支障を來さぬ限り、餘り高度差の大きくならぬ範圍に、スタートを少しく高所に置く事は何等差支へない事である。各種斜面の割合の同樣にするとの趣意を尊び、レコードの優秀、レーシングテクニックの修練の上に甚だ有効な手段である。

勿論此の時にはスタートは一定時おきの方法によらなければならぬ。山の中腹等に眞に公平なスタートラインを求める事は絶對に不可能であるからである。又數十人を一度に出發せしむる事は、陸上のマラソンには可能であるかもしれないが、スキーレースでは殆ど支障なしに行ふ事が出來ない。此の缺陷は今度の四キロレースに於て最も甚しかつたのであるが、スキーと杖の衝突の甚しかつた事は、名狀すべからざるものであつた。ランナーの技倆の隔りの大きい時代には之でも差支へないが、實力相伯仲して來た現在のスキー競技界に於ては、同時に多人數を出發せしむる事は少くとも選手權大會では廢すべき事である。

次にランナーの走法を一寸考へて見るに、技倆の進歩は確かに認める事が出來る。そして殊にそのレーシング技術の比較的圓滿な持主の勝利が、第一回二回の大會の頃よりも目立つて來た。登りに强かつたランナーは確かに有利であつたが、然し登りのみ或は降りのみに優れたランナーでは、到底充分の成果を收める事が出來なかつた。之は明かに登行法、下降法、平地滑走法の技術の進み來つた事を物語るものである。

然し後述する如くタイムの甚だ振はないのは、猶競走者の技術に欠くる所が少くなくないと考へられる。平地の走法にせよ登行法にせよ、一層研究すべき餘地が大部認められるのではあるまいか。全身の平等なる勞力を致すのが、スキーレース殊に長距離に於ける主要な要領であるにも拘はらず、腕のみで走つたり、脚のみで走るのではないかと考へらるゝ點も無いではなかつた。現在のスタート法に缺陷が

ある爲に長距離に適する走法が閑却せられ勝ちになつて居たり、又はランナーがコースそのものにとらはれ過ぎた爲であるかも知れないが、今一歩を突き進んで眞の合理的走法に到達して頂きたいと思ふ。

猶選手の使用したスキー及び、杖は、上述のランナーの技術と密接の關係があり、雪質地形にも大いに左右せられたのであるが、此の點でも各種の狀態の最も良好であつた關東選手の勝利を得た事が注意すべき事である。更にスキー具のみならず、昨年來漸くディスタンスレーサーの間に重きをおかれて來た、塗蠟法の重要さが一層著しくなつたそしてこの塗蠟法の問題は、今後技術の進歩に伴つて一層深く研究せらるべきであり、レーシング技術は又此處にも發展の根據を置かなければならない。

最後にディスタンスレースのタイムに就いて從來のレコード或は歐州レコードと比較して見たい。之に依つて最近數年間のディンスタンスレース界の進歩は最も明かに數字の上に現はれる事になるのである。

第一回（於小樽）

一キロ	五分五九秒（上野）	一キロ平均	五分五九秒
四キロ	二七分　四秒（秋山）		六・四六
一〇キロ	六三分四四秒（島本）		六・二二
八キロリレー	四九分　五秒（小樽商業）		六・八
總平均		一キロ	六分一八秒

第二回（於高田）（スタートとゴールの高度差ある爲タイムの比較は無意味なり。）

第三回（於大鰐）

四キロ（スタートとゴールの高度差大なり）			
一〇キロ	六二分三四秒（松田）	一キロ平均	六分一五秒
一六キロ	九九分三一秒（中川）		六・一三
一六キロリレー	九一分三五秒（早大）		五・四三
總平均		一キロ	六分〇秒

即ち單に數字の上のみでも一キロに就き一六秒の差が現はれた。然るに第三回のレースは全て距離が倍加せられたものであつて、その上大鰐のコースが困難な地形を有し、雪質は小樽に比して甚だ劣つた事を考慮に入るる時は、實際の相異は單に一六秒にのみ止まらぬ事を認め得る。實際に於ては一キロにつき一分位のタイムの短縮があつたに相違ない。それは小樽と同樣の地形、雪質に於て競技した北海道豫選會に於てさへも、リレー、一〇キロ、一六キロのベストレコードは皆一キロ平均五分一六秒以内であつた事に依つて證明する事が出來る。

次に最近に於ける歐洲レコードの二三を紹介し、彼我の懸隔の幾何なるかを見よう。

ウンドーメンデー（瑞典）

二〇キロ　八九分三八秒（フェルヴルヒ）　四分二八
ホルメンコーレンデー　一九二四年
一七キロ　六四分三七秒（ハウク諾）　三・四八
オリムピック（シャモニー）　一九二四年
八キロ　七四分三一秒（ハウク諾）　四・八

即ち我國レコードの六分は到底及びもつかぬ狀態であつて、北海道に今年現はれたレコードを以てしても、數字の上のみに一キロにつき一分近くの差があつて、我國ディスタンスレース界の前途遼遠を思はしめらるゝのであるが、實力既に二ヶ年の間に一キロにつき一分を縮め得たとしたならば、我々の努力も必ずや近き間に之に順じこの進歩を齎し、彼のレコードに接近し得らるゝ事と信ずる。既に我國ジャムプレコードは三〇米に達せんとして居るのであるが之が四〇米に近づく時は、我等のレコードも一キロ四分三〇秒を樂に切る事が出來ると思ふ。

ジャムプ競技

廣田戸七郎

陽光は照り輝いていやが上に大會の盛大さを微笑むが如く。明くる大會第二日目は亦前日に打つて代つての日和であつた。

種目の都合上、豫定より約一時間半程遲れてスキー競技中の王者ジャムプ競技は開始せられた。

開始に先ちて所謂ジャムプの壯快さを味はんとして集ひ來れる群集無慮三万と號せられた。私の經驗よりしても前後三回の全日本スキージャムプ競技會中、本日程の觀衆の來集を見たことは始めてであつた。

練習中の東北、北海道選手の一躍又一躍の飛躍振りに、觀集の發する驚嘆の聲は、洵に天地を壓せんばかりの氣勢であつた。

さわれ本邦屈指のジャムプア緒方君の不慮の慘禍には、又喧騒の聲も聞くだに悲痛そのものの感がした。ジャムプテクニツクに見出す欠點が若しも緒方君にあつたとすれば彼の禍はジャムプ發達の爲に大いなる支障となるべきことどもの一つとなつたかも知れぬ。然し若し吾々があの負傷前の緒方君の飛躍振りを見るならば、幸ひに吾々は當時の緒方君の技倆、それは決して今私が推憶を猛ふせる一事には觸れて居らないことに氣附き得るであらう。即ち緒方君の負傷それは決して彼の技倆の未製の致すところではなくてジャムピングヒルの人爲的加工の欠陥に外ならぬものである。即ち緒方君の不祥事は決してジャムプ技なるものの危險なことを語るものではなくて、ジャムプ競技を行ふ爲めに必要にして欠くべからざるジャムピングヒルの設備加工の完備の如何に重大なる意義を有するかを敎ふるに足るものと解することが出來る。

午前中の良好なりし天候は余りに競技者、觀覽者、そして審判者に滿腹の喜悅を與へたかの如く考へられた。

競技開始前の一不祥事、幸ひにして再發せざらんことを希ふと同時に、天候の良好も亦競技終了まで持續せんことを心祕かに冀ふて、競技開始を待つた。

第一ラウンドは關東今井君の皮切りによつて三〇名の中四名の棄權あり二六名の飛躍があつた。不倒者二六名中八名、先つテクニツクの上から見て、このラウンドの八名の不倒者達は、相當の出來榮えであつたが、良好な人でも滿點二〇點をつけられる樣なスタイルの立派なジャムパアはなかつた。然し余裕あるジャムプ振りを見せて居るものと氣の拔けた樣なジャムプ振りを見せて居る人との區別はついた。

然しまづ八人のうち私の見た上から云ふと(飛躍順から云つて)矢田君、讃岐君、伴君、青山君、牧田君の五名がこのラウンドでの成績で入賞圈內の人達であつた。

第二ラウンド飛躍者廿六名中不倒者一〇名、第一ラウンドで不倒であつた人の內で一名轉倒で、代るに三名の新なる不倒者が加つた譯である。このラウンドに於ける不倒者中青山君のスタイルは全く拔群であつた。他は少くとも素人眼に見ても欠點のあるスタイルデあつた。

このラウンドに於ける私の見た入賞圈內の人は、小林君、秋野君、伴君、青山君、牧田君の諸君であつた。

第三ラウンド、第一ラウンド、第二ラウンドで大体入賞圈內の人も見當がついたが、然し改正されたる競技規定の內容では、全部のジャムパアが一回必ず轉倒したとすれば別だが、兎も角三度不倒でなければ、なかなか入賞の見込がないと見てよいのであるから、未だ二回目の豫想は決して最後の決定的成績を語つてくれない。そこに非常に各人

の奮闘振りと自重振りとがうかがはれた。第二回目の割合に不倒成績の良好であつたのに引き代へて第三回目は不倒者が二回目より減じて終つた。全飛躍者廿二名中不倒者は七名であつた。第二ラウンドまで不倒であつた人が二名轉倒して居る。而して三回共不倒である人が結局四名殘つた

而して第三ラウンドだけの成績では末武君、秋野君、青山君、藤田君、吉崎君等が優れたものであつた。第三ラウンドに於て吉崎君の最長不倒距離二二米一〇は、特筆に値するものであつた。

前後三ラウンドの全体の成績から見て三回共の不倒者伴君、青山君、秋野君、中居林君は、たしかに入選圏内にあることは發表を俟たずに豫想することが容易であつた。

案の條結果の發表では、三回不倒者の青山君、伴君、秋野君、中居林君の四人が入賞して居た。

是等入賞者は、ジャムブ修得年數から云ふならば青山君が最も古參で、他の三人は未だジャムブを始めてから日尚淺い人々である。然しスキー修得年數から云ふならば、少くとも五年以上スキーの練習を積んだ人達で、充分スキーの穿き捏なしの完成して居る人達である。此結果から考へてスキーコントロールの熟練さが、如何にジャムブテクニックの會得に大きなファクターとなるものであるかと云ふことを容易に知ることが出來ると思ふ。

この入賞せる四人の選手について、大へん興味ある問題が一つある。それは飛躍順位が結果の成績に及ぼして居る影響である。あの大會當日には秋野君が飛躍順位一三番で伴君、中居林君、青山君は夫々一七番、一八番、一九番の順序であつた。秋野君は他の三人と少し隔つて居たが、秋野君の前は大分不成績の人が續いて居るので、何時も緊張して然も自重して秋野野君は飛んで居つたやうである。不成績の人がずーと飛んだ後によく立つて居た秋野君のスタイルは可なり立派に見へたのも無理はない。又試合上手なやり方で安全な策を講じて居たやうであつた。でこれは先づこれとして、他の三人が相續いて、しかも一人が立てば次が立つと云ふ工合に大へん歩調が揃つて居たやうであつた。一番有利であつたのは中居林君で、中居林君は一向他に索制さるるやうなことなく樂に飛ぶことが出來たやうであつた。

それには中居林君がこのシーズン前に緒方君のコーチを受けて居たり、練習中伴君や、青山君等と一緒に練習をして居て、精神的に已に味方の樣な風で、割合に安定な人を前後に相擁して居たやうな形で、丁度水泳なぞで、一緒に釣られて遠泳に成功すると云つたやうな現象と同じく、此三人が如何にも一本の糸にでも堅く結びつけられて居る如く調子よく進んで居たことが、洵に面白い現象であつた。

此處に若しも讃岐君か、牧田君でも續いて居ならば或は續いて立てたかも知れなかつた。此處にスキージャムプの順位が如何に大きな價値を結果にまでもたらすものであり、しかも非常に飛躍順位と云ふものが大切な意義あるものであるかと云ふことが判る。

今度の大會ではジャムパアのスタートの位置を一定されずに任意にしてあつたことは、審判者側に一考あつて欲しき問題であつた。何故スタートを一定せねばならぬか、それは說明するには余りに貧弱な問題である。

ジャムプ技術發達の上に矛盾も生じやう、新らしく改正されたる採點形式表の上から云つても不合理が起つて來ることも一つある。競者に對する不公平と云ふことも生じて來る。從つて又各競技者の眞の實力の競技的價値も失はれてくる。と云つたやうなもので、まあ國際スキー競技規定を可成り多く採用して來たのであるから、もう一歩踏み入つて精しいところまで、一層のこと採用して終つた方が余程よからうと思ふ。

次に彼はテクニックの上から特に著しく私の目に映じた欠陷の三、四を擧げて見たいと思ふ。

一、參加ジャムパアの技術に非常の差があつた。即ち或地方のシャムパアには、殆んどジャムプテクニックの如何なるものなるかさへ判らないやうなのを見受けた。これは各地方別的にジャムプ發達の程度の差異を、余りに露骨に表はして居た。

二、或地方の選手を除いて殆んど大部分の地方のジャムパアのスキーが滑らなかつた。ジャムプには滑らぬスキーは禁物であることが、ハツキリ判つて居らないらしい。それなら未だ良いが、遠く飛ぶと困ると云ふ樣な考へからワザと塗蠟しなかつたものとすれば、それは大へんな考へ違へのことである。

三、クローチングダウンの姿勢が未だ高いやうであつた

四、臺上で踏み切らずに滑り落ちて居た人が可成り多かつた。

五、フライトではスキーは割合に下傾せられて居たが、体の前傾が忘れられて居た。恐らくフライトで着陸斜面なぞ見えぬ人があつたに相違ない。

六、ランディングで兩スキーの前後の開きが、未だ〳〵不足であつた。概して兩スキーが一足に揃つた儘落ちて、それで頑張つて立つて滑走して行つた人がなか〳〵多かつた。

然し斯うした欠點は、勿論全部の人に共通のものではないが、大部分の人がさうであつたと云ふまでのことである

全く我田引水ではないが、本當に公平な立場から見て、北海道のジャムパアが如何にジャムプの爲めに熱心に練習

研究し、より優れた技倆をとらへんとして居るかと云ふ點から見るならば、全く他地方の追隨を許さぬもののあることを認めらるると思ふ。たしかに今日の狀態では、北海道のスキー即ちジャンプの感があると云つても過言でなからうと思ふ。東北地方があれだけのジャムプの進境を見せたのも亦樺太地方のジャムパアに割合に優れた人の出たのも公平な見解からして北海道のジャムパアの刺戟によるところが少くないと思ふ。然し北海道のジャムパアの技倆、それはまた外國のジャムパアの技倆に達するまで如何に多くの日時を費さねばならぬかを知るべきである。

最後に今日のジャムプ大會の全体の成績を一括して見やう。

ラウンド	飛躍數	不倒ジャムプ(%)	不倒飛躍平均距離(m)
1	26	30.7	17.37
2	26	38.46	16.82
3	22	31.81	17.90
總平均	24.66	33.65	17.36

尙この總体的成績と先頃行はれたる全國中等學校スキー選手ジャムプ競技の總平均點數の成績を比較して見ると次の如くなる。

競技會名稱	飛躍數	不倒ジャムプ(%)	不倒飛躍平均距離(m)
全日本ジャムプ大會	24.66	33.65	17,36
全國中等學校ジャムプ大會	33.7	31.70	11.40

此全体の成績から、ノールウエーに於ける世界的のレコードと比較することは、先づ第一ジャムピングヒルが貧弱であること、第二競技者が未熟なることの大体二つの大きな理由からして、大して意義のないことであるが、まあ一九二四年に於けるノルウエーのジャムプ成績の一例を掲げて見やう。如何に大きな差があるかに驚くであらう。

	不倒ジャムプ(%)	不倒ジャムプ平均距離(m)
Old Class	81.26	32.5
Ist "	75.54	34.0
IInd "	59.40	34.37
Yonag "	67.63	32.62
總平均	67.38	33.37

先づ此處に表はれたる數字からしても、到底未だ〳〵我が國の一般のジャムプ技術は彼等の足元にも屆くことは出來ない。

この表によれば各クラスを綜合して平均せる飛躍距離が三三米三七で何だ三〇米臺かと思はれるが、所がその三〇

米以上飛ぶジャムバァがどの位居るのかと調べて見ると、オールドクラスで三三人强、ファストクラスで七三人强、セコンドクラスで一二〇人、ヤングクラスで六八人强、計二九五人强と云ふ。洵に素張らしいものであることを知るのである。（但しこれは一九二四年のジャムブ大會に於ける參加者數である）兎も角スキージャムバァと云ひ得る三百人近くの人達は皆三〇米以上飛ぶのである。是丈の人が揃つて居て其内から最長不倒距離五〇米前後を飛ぶ人が出て居る譯である。個人的な成績から見て我が國の今シーズンに於けるスキージャンプ最長不倒距離飛躍レコードホールダーは、村本君の二八米二〇（北大スキー部大會レコード）であるが、是を昨シーズンのノールウエーのジャムブ大會に於けるタムスや、オーケルンや、イエンセン等の四一米に比すれば未だ〳〵遙かなることを知るのである。而もこのノールウエーの是等の人々のこのレコードは、前年の四六米に比すれば不成績のレコードなのである。

丁度今ノールウエーのホールメンコーレンのジャムブ大會レコードをくつて見ると、ノールウエーの一昔前の時代より未だ悪い位の成績である。まあ比較は雲泥の差の大きことを探すに過ぎぬ樣なものであるから、此位に止めて置く

隨分亂暴な書方をして脱稿せねばならぬことになつたが私は何處までも最も公平にとらわれぬやうに論述し來た積りであるが、萬一支障のあるやうな箇所があつたら、どうぞ御寛恕を希ふ次第である。

故板倉君紀念碑建立

立山村芦峅の案内組合及び佐伯靜氏の發起にて板倉勝宣君の紀念碑を同村に建立するとの議あり。板倉家、槇有恒氏その他、學習院、慶應、北大關係の舊友等之に贊して右紀念碑建立資金を醵出する相である。

彙報抄錄

スキー大會東北地方豫選

第一日（一月卅一日）

一〇キロレース決勝

一着　田村吾一郎（大湊要港部）　タイム五四分一五秒

二着　岩谷正雄（青倶）　三着　白鳥菊三郎（大湊）

四着　吹野清作（大湊）　五着　吉崎國四郎（大湊）

六着　成田與八郎（八師）

四キロ決勝

一着　野津谷精一郎（大湊）　二〇分四四秒

二着　平治三郎（大湊）　三着　中村　勳（青中）

四着　中居林德藏（大湊）　五着　成田正榮（青中）

六着　海老名捷彌（弘中）

一六キロ決勝

一着　五十嵐謙三郎（大湊）　九六分五六秒

二着　小高信美（大湊）　三着　高橋忠夫（大湊）

四着　畠山健治（大湊）　五着　岩谷正雄（青倶）

六着　柴田長作（八師）

第二日（二月一日）

一六キロリレー決勝

一着　大湊要港部（吹野清作、五十嵐謙三郎、小高信美　田村吾一郎）

ジャムプ

一等　藤田勇藏（弘中）　一五點二

二等　加賀谷　實（青商）　一四點

三等　中居林德藏（大湊）　一〇點二分

四等　失田昌四郎（弘高）　九點五分

五等　中村　勳（青中）　九點二分

六等　吉崎國四郎（大湊）　八點九分

第三回全日本スキー選手權大會成績

第一日目　二月一四日

一〇キロレース決勝

一着　松田幸義（北海道）　タイム六二分三三秒七

二着　片桐　博（北海道）　三着　吉田　清（關東）

四着　竹節作太（關東）

四キロレース決勝

一着　高橋　昂（關東）　タイム二二分五七秒一

二着　矢澤武雄（關東）　三着　近藤文太（信越）

四着　草薙清一（樺太）

一六キロレース決勝

一着　中川　新（關東）　タイム九九分三〇秒六

二着　田村節郎（樺太）　三者　高橋　昂（關東）

四着　石塚英一（信越）

第二日目

一六キロリレーレース決勝

一着　關東チーム　タイム九一分三五秒二

二着　北海道チーム　三着　信越チーム

四着　樺太チーム

ジャムプ競技

一等　青山　馨（北海道）　一八點七〇

二等　伴　素彦（北海道）　一八點一二

三等　秋野武夫（關東）　一七點九八

四等　中居林總藏（東北）　一七點六五

各地力別得點

團体	各競技得點 4キロ	10キロ	16キロ	16キロリレー	ジャムプ	總得點
關東チーム	5+3=8	2+1=3	5+2=7	10	2	30
北海道チーム	0	5+3=8	0	6	5+3=8	22
信越チーム	2	0	1	4	0	7
樺太チーム	1	0	3	2	0	6
東北チーム	0	0	0	0	1	1

一九二五年ホルメンコーレンデイ

（ノールウエー國際スキー選手權大會日程）

二月一九日（木）　五〇KM　ディスタンスレース

二月廿二日（日）一七KM（一般競技）ディスタンスレース

二月廿三日（月）ジャムプ競技　ホルメンコーレンシャンツェにて擧行。

日本スキー團体總覽 〔二〕

一九二五年一月一日現在

照會事項

一、設立年月日
二、目　的
三、會員數
四、會員の種別及會費
五、會員の資格
六、役員選任の方法及び任期
七、事務所(又は通信宛所)
八、代表者
九、常務者
一〇、講習會、競技會の主催
スキー場の計備其他の事業
二、主なる研究事項、技術上の傾向

樺太眞岡スキー倶樂部

一、一九一四年
二、スキー術の普及發達
三、百八十六名
四、正會員のみにて會費不要
五、眞岡在住スキー同好者一般
六、會長に眞岡支廳長を推戴し役員は會長依囑す
七、樺太眞岡支店内
八、會長佐藤金吾
九、常務理事片谷善三郎、中野愛介
一〇、毎年講習會及競技會を開催す
二、—

フオレスト、スキー倶樂部

一、一九二四年十一月一日
二、會則參照
三、參拾八名
四、顧問一、會長一、幹事若干名、講師二名、會員、會費は臨期必要に應じ徴收
五、樺太廳林務課に勤務する者、
六、會則參照
七、樺太廳林務課内
八、樺太廳技師庄司彌造
九、村山丈夫
一〇、樺太中央スキー倶樂部の講習會は一月中旬よりなるも本倶樂部は降雪と同時に講習會を開催し一月中旬より講師の關係上中央クラブと併合す
スキー場は中央スキー倶樂部練習場
一〇、森林内の急斜面登降に必要なる課目及スキー術一般實地演習を繰返す毎に進歩の度を知り得
二、樺太中央スキー倶樂部の内の一團
本倶樂部マーク、FSC

網走スキー倶樂部

一、一九二一年二月一一日
二、スキー術普及登山
三、八十名
四、幹事を特別會員他は普通會員、會費は隨時徴收
五、滿十二才以上男女不問

六、幹事會に於て決し任期滿壹ヶ年
七、網走町北通相馬病院(北海道北見國)
八、古屋清軒
九、安藤宗一、高田亦次郎、才野松太郎
山本勇
一〇、時期により講習會を開く、當倶樂部にて毎年一回北見大會を開く、倶樂部にてジャンプ臺を設立す。
二、實用的技術及ジャンプ、スキー登山年々著しき進歩を爲す。

三菱美唄スキー部

一、一九一七年八月二七日
二、部員相互の心身の健全を圖る
三、一〇〇名
四、給料二〇〇の一
五、美唄鑛業所役員及鑛夫
六、選擧並指名、任期二年
七、空知郡美唄炭山局區内三菱鑛業所内
八、白鳥恒雄
九、佐藤進外五名
一〇、正月合宿、毎年一回大會、ジャンプ臺及ヒュッテを有す
二、ジャムブ、クロスカントリーレース シュタイプアイゼンをも使用する登山。

三菱倶樂部大夕張支所 スキー部

一、一九二二年三月二二日
二、當地方初心者一般の指導に當り進境普及を促すを目的とす
三、約五十六名
四、倶樂部員並に青年團員、軍人分會員(徴收せず)
五、私物スキー所持者
六、別に方法、任期等なし、部として常任委員を置く
七、北海道夕張郡清水澤三菱大夕張炭坑スキー部
八、長崎團次郎、委員小柳彌六
九、淺田武雄
二、毎年一回大會を開催、夜間練習の設備として電灯千六百燭光を點じある外固定シャンツェあり、其他年一回北部合宿練習

北海道炭礦汽船會社 支店社友會スキー部

一、一九二〇年一二月
二、ウインタースポーツの一般化、体育の普及發達
三、一〇〇名
四、正會員、準會員
五、炭礦汽船會社員を正會員夕張鐵道會社員を準會員とす
六、任期一年
七、夕張町字鹿ノ谷五番地
八、大西一男
九、長澤晄助外四名
一〇、スキー山岳に關する講演、講習會、活動寫眞會、練習場に小舍を作り點燈す。
二、夕張地方に於ける降雲並に融雪期及汽溫狀態を統計的に記錄す。

札幌スキー倶樂部

一、一九二五年一月一日
二、札幌スキー家の親睦とスキーの普及

發達を計り札幌市スキー界を代表す
三、六九名
四、會費年額金參圓入會金貳圓
五、札幌市及附近に在住するアマチュアスキー家
六、定期總會に於て會員の互選により理事若干を選む任期一年
七、札幌市北海道廳内三瓶勝美氏氣付
八、理事長　三瓶勝美
九、理事中野誠一、外五名

小樽スキー倶樂部

一、一九二一年九月貳拾五日
二、スキーの研究、發展普及を計る
三、百六拾八名
四、名譽會員(一時參拾圓以上)贊助會員(一時二十圓)正會員(年五圓)
五、—
六、理事二十五名以内は會長の推選に依り任期二ケ年とす
七、小樽市稻穗町東六丁目村住方
八、理事長黑崎三市
九、理事村住美喜三
一〇、數回講習會を催す、全小樽實業團、中等校、小學校の競技大會を催す所屬スキー場貳ケ所、外に目下シャンツェ加工中

米澤スキー倶樂部

一、一九二四年十一月十五日
二、別紙規則參照
三、普通會員貳百名、學校生徒千三百二十五人
四、普通會員年額金一圓學生會員よりは徴收せず
五、高等小學校兒童以上のもの
六、評議員は役員會にて推薦し幹事及委員は會員の互選
七、米澤市北堀端町三〇四番地本會事務所
八、渡部兵馬
九、小關碩也、鹿内德三郎
一〇、本月二十六日より向ふ四日間一月四日より向ふ四日間の二回小野川スキー場にて競技大會を開く、其他米澤市附近に練習場二ケ所を有す
二、普通滑走ジャンプの練習及登山の研究並にスキーを實用化する實際の計畫

妙高スキー倶樂部

一、一九一四二月二十五日
二、スキー趣味の普及研究、會員の身心練磨、外來スキー客に便宜をなす
三、名譽會員十八名、特別會員九十名、普通會員百三十五名
四、名譽會員、特別會員、普通會員、名譽會員、特別會員、隔地よりの來遊者にして三圓納入したるもの普通會員、入會金五十錢納入したる在住者
五、スキーに趣味あり本會の目的に贊成入會したるもの男女の不問
六、會長は推薦、其他は會長囑託、任期は三ケ年とす
七、信越線田口驛妙高山溫泉土地株式會社内
八、名譽會長　星野錫
九、常任幹事大森新治、同長崎主

一〇、外來者講習會　一月一日より一月五日迄、三月廿一日競技大會
初歩者練習場の增設及練習場へ休憩小屋建設練習場の案内を建設す
二、「ジャンプ」に就て、登山スキーに就て。年々進歩す

關山スキー倶樂部

一、一九一八年一月一九日
二、スキー術の普及發達
三、二四二名
四、名譽會員、特別會員、正會員（普通會員）
五、本會の趣旨に贊成したるもの
六、普通會員の公選とし任期二ヶ年
七、新潟縣中頸郡關山村大字關山四八四九番地
八、村越惣藏
九、内田昇一郎、岡本義雄、
一〇、毎年一回競技會を開催し講習會は志望者の人員により時々開催す。スキー外來者の斡旋をなす。
一〇、諸國式一般技術の研究スキー製作上の研究、諸國式スキー技特にジャンプの練習盛なり

草津スキー倶樂部

一、一九一二年二月
二、民衆体育增進の一助、方法として草津温泉附近を一般スキー家に開放す可く努力する事
三、現在七十三名
四、青年有志、學生、會費年壹圓也、不足分は特志家による
五、スキーを穿き得るもの
六、推選、任期なし
七、草津温泉、草津スキー倶樂部
八、黒岩忠四郎氏
九、上原長十郎
一〇、競技會毎年シーズンの終りに於て開催スキー場は當地營署に交渉中
二、クロッスカントリーの研究並に主なる傾向なり

富山スキー倶樂部

一、一九二〇年一〇月
二、スキー術の普及發達と冬期体育の向上に資す
三、一〇七名
四、正會員、贊助會員、名譽會員
五、—
六、會員互選、任期二年
七、富山市星井町九八市川茂吾郎方
八、市川茂吉郎
九、金子清五郎外三名
一〇、講習會、競技會を縣下に行ふ、立山登山者の世話

名古屋スキー倶樂部

一、一九二〇年十二月二十八日
二、スキー技術の奬勵、練習の便を計る爲あ、社交の爲め
三、五十七名（一九二五一月六日現在）
四、名譽會員、通常會員及學生會員の三種、通常年四圓〇〇、學生年二圓〇〇
五、入會者に資格を設けず、主に紹介に依る
六、選擧に依る、任期滿一ヶ年
七、名古屋市中區御器所町北山七十八秋

元茂造方

八　只會の理事七名、秋元茂造、青木秀彦、早川藤雄、國松豊、南博、大崎虎二、祖父江重兵衛

九、秋元茂造、青杜秀彦、早川藤雄

一〇、毎年冬期休暇中赤倉に於て總練習會を開く明年より之を講習會と爲す豫定、スキ大會は一二月中伊吹山にて開催す

二、主たるものなし、毎年練習日數二週日を出てされば技術の進歩に見る可きものなし

六甲スキー倶樂部

一、一九一二年十二月

二、スキーに關する諸般の事項の研究

三、百廿九名

四、名譽會員、特別會員、正會員、會費年二圓

五、—

六、互選、任期未定

七、大阪市北區高垣町

八、—

九、吉田義治

一〇、日曜、祭日に信越、伊吹山、六甲山其他に於て練習會、競技會開を催し年數回『雪のさゝやき』發行す

二、スキーテクニック及マウシテインヤリングを研究しつゝあり

姫路スキー倶樂部

一、一九二〇年二月

二、山岳の研究、スキー及登山の享樂

三、一二

四、平等、實費負擔

五、十三、十二名に限る

六、任期一年

七、姫路市西矢服町三八銀行

八、本庄德藏

九、上野新太郎

一〇、但島の丹波國境へ一日旅行の練習越後方面へ練習に行く

優良なるスキー地
設備の完全を以て知られたる

五色温泉

奥羽本線板谷驛より近し。
東京より九時間にて達す。

山形縣南置賜郡山上村板谷

青山温泉

スキー地として重要な條件である所の雪質、雪量、地形等皆充分に惠まれてゐる當温泉は、年來の經驗によつてスキー家の爲に出來るだけの御便宜を計ります。

■■■■■■■■■■■■

函館本線昆布驛より一里半

札幌より五時間

函館より七時間

優秀ナルスキート其用具

小樽

梅屋運動具店

登山靴とスキー靴

東京市本郷區四丁目角

太田屋靴店

電話小石川四七一二番

振替東京六一二七番

◆山とスキーの會は北海道帝國大學スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に趣味を持たるる方が一人でも多くお讀み下さることをお願いたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されんことをお願します又印畫の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、、。を一字とし、行を更めるときは一字下げること。

◆記事中の數量は全て、C.G.S.係によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

定價　金參拾錢

＊前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。

＊御送金はなるべく振替にてお願致します。

＊六冊分前金拂込の方には送料を頂きません

＊前金の切れた時には最後の分の包裝にその旨記します。次の御送金あるまで配本を見合せます。

＊本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、緣故の有無にかゝはらず雜誌の代價は頂きます。

大正十四年三月三十一日印刷
大正十四年四月一日發行
（毎月一回一日發行）

編輯兼印刷兼發行者　佐々木政吉

印刷所　札幌市北一條西二丁目　札幌印刷株式會社

發行所　札幌市北六條西六丁目　山とスキーの會

振替口座小樽八四九五番

La Gazeto
de la
Monta kaj Skia Klubo
No 48. Aprilo. 1925. Sapporo. Japanujo.

大正十三年十月二十七日第三種郵便物認可
大正十四年三月三十一日印刷納本
大正十四年四月一日發行

美滿津ノ
ウィンター・スポーツ
各種用具

合名會社
美滿津商店
東京・本郷・赤門前

山とスキー 第四十八號

定價金參拾錢